





もしかして歩夢、太った…？

昼下がりの教室、いつもより早く終わった授業に生徒たちは喜びを感じ廊下へと足を運ぶ。軽快なテンポを上履きで奏で昇降口に向かう者、他クラスの友人と放課後の予定を話し合う者、軽食を摂りに学食を訪ねる者。皆が皆、統一されたわけではない行動をし校舎の何処からでも生徒の声が聞こえてくる。一学年で千人を超える中高一貫校・私立虹ヶ咲学園、その中で結成されたスクールアイドル同好会のメンバーである上原歩夢もまた学食の窓際で食事をしていた。「はむっ！んんぐやっぱり美味しい！」

ハニートーストを一口頬張ると口の横に付いたはちみつなど気にすることなく緩んだ表情を浮かべる。時刻は午後三時、ゴールデンウィーク直前の短縮授業で通常より早めの放課後を迎えている。また一口を甘味を口に運ぶ様子は如何にも女子高生らしく、ブラウンの横髪が食べ物に付かないようフォークを持たない方の手で軽くかき上げるしぐさが一層可愛らしさを醸し出していた。

「あれ？歩夢じゃん、こんな所でどうした…ってハニートーじゃん！一人でこっそりおやつですかな〜太るぞ〜！」

開いた窓から吹き込む風になびいた金髪、一際目立ちそうな存在が歩夢の後ろから声を掛ける。同じくスクールアイドル同好会のメンバーである宮下愛も学食に来ていたのだ。手には紙パックの野菜ジュース、ここを訪れた目的は食事というよりも自販機で飲み物を買うことだったようである。歩夢を見かけたという。

「…いや、これはね！ちよっとお腹が空いたというか…別にやましい事はないよ！？」

急な声かけに驚いたのか、一口を飲み込むと慌てて弁明をする歩夢の姿は若干の違和感を感じとる。緩やかな輪郭とニットベストに浮き出た脇腹の…。明言することを避けたくなるソレは年頃の女子が忌まわしく思うものに違いなかった。歩夢自身もその存在に自覚しているのか、瞬時に手を脇腹に沿って隠そうとするが今度はその手が柔らかさを帯びていることを愛に伝えてしまった。

「もしかして歩夢、太った…？」

数刻の空白を経て愛は思い切って問いかける。互いに困惑しているものの歩夢は自身の身体に起きた変化を向かいに座った愛へと話し始めた。

時は遡る事一か月前の四月、新学期への期待に胸を膨らませていた歩夢のもとにファンからの荷物が届いたという。スーパースターとはまだお世辞にも言えない活動実績に加え可愛らしい字で書かれた配達票が歩夢の警戒心を薄くさせ、気が付けば箱の中身を手にしていた。それは明らかにお菓子の類、丁寧に袋詰めされクール便で届けられた糖類の山を歩夢はかき分ける。チョコレートに小さなドーナツ、箱の一番下には手作りらしき大きなホールケーキまで。添えられた手紙には一生懸命に書いたとされる数枚に渡るほどのファンレターと誕生日を祝うメッセージ。三月を迎えた誕生日を遅れたものの祝福する文章とプレゼントたちは歩夢にとって初めて受け取る宝物になっていた。

(こんな心のこもった贈り物をくれる人が悪い人なはずがない……！)

そう思い、少女は一粒のチョコレートを袋から出し頬張る。市販のものに劣らない味に心がときめいてはまた一粒。気づけばお菓子だけで満腹になる程を食べ、床には広げられた紙切れと甘い匂いが広がっていた。

(いけない、食べ過ぎちゃった……片づけないと……！)

手を伸ばし、座り込んだ体勢から近くに広がる包み紙たちを拾い集めようとする。近くに落ちている物を拾いきり、手を伸ばす範囲を広げていく。次第に集めた紙切れは片手に収まらなくなっていく歩夢の姿勢も立つことを余儀なくされた。

ようやくお菓子の残骸を拾い終えゴミ箱に捨てようとした彼女はその身の重さを実感した。普段なら見えるはずの足元が曲線を描く腹部の盛り上がりで見えない。妊婦と呼ぶには小さいがフードファイター並みの膨れ具合を目の当たりにし夢ではないかと自分の目を疑う。だがその手触りは明らかに現実のものであり自分の腹部に宿ったものである。

(嘘、だよね……まさか)

姿見の前に立ち身体を一望する。そこには制服越しにでも強調されたお腹と羞恥で顔を赤らめた少女が映る。予想していなかった事態に甘味の誘惑に耐えられなかった自身の甘さを恨めしく思いつつも時計の針は進み、登校時刻を示していた。

急いで手に持つ鞆、きつく感じられる制服に身を包み、少女はまた一粒のチョコレートを堪能して部屋を後にする。下り階段で揺れる腹部。上下左右に身体が揺さぶられ若干のコントロールが奪われる。それは歩いていても変わらず、一定のテンポでバウンドする腹部。こんな姿を同級生に見られたら…と考えるとそれだけで恥ずかしい。

教室に入る時には多少の余裕なのか慣れが生じたのか腹部の苦しさも消え、意図的に凹ませる事ができるようになっていた。

(うう…力を抜いたら、皆にバレちゃう…!)

これも食べ過ぎた自分に非があるのだが、やはり同級生にバレるのは避けたいと思ったのか一日中、可能な限り凹ませたお腹をかばいながら過ごすことになった。

「そ、そっかあ…あはは…それでその…太っちゃった感じ?」

ことの発端を聞いた愛は苦笑いしながら歩夢の目をちらりと見る。恥ずかしさを隠しきれない表情で歩夢はその視線に目を合わせ頷く。愛から見て確かにその輪郭は丸くぽっちゃりしたものであったが増量していてもたかが数キロ、あっても十キロ程度に思われる変化。

「でもさ!それくらいならちよっとの運動で痩せれるし、ほら!ダンスのれんしゅうとかさ!」

「…あのね、実はそれだけじゃなくて…」

励ます愛の言葉を受けて歩夢は何か耐えきれなくなったのか口を開き席を立つ。「こっちに来て」と言わんばかりに

向かいに座っていた愛の手を取り、テーブルには空になったジュースのパックと完食された皿、二人は学食を後にした。

「あ、歩夢！どこに行くのさ〜！」

強く握られた手に体温を感じながら足早に進む歩夢に愛は問いかけるが返答はない。「愛さんこのまま駆け落ち〜？」などと軽く問い直しても歩夢の足は止まらず、気づけば使われていない空き教室の扉に手を掛ける歩夢がいた。中に人がいるはずもなく、付けられた電灯には少し暗さを感じる。再び愛が声を掛けようとする歩夢の方が先に言葉を発した。

「実はね…さっきの話には続きがあつて…」

そう言って歩夢はニットベストを脱ぎ始める。突然の脱衣に愛の困惑は必至。急に何をしだすのかと聞こうとするがそれより先に歩夢は脱ぐために愛はまるで怪談番組を観ているかのように両手で顔を隠しながら指の隙間から歩夢を見る。

「あのね…本当は」

シャツにスカート姿となった歩夢がボタンを外していく。薄い生地の下には同級生の柔肌、更衣室ならともかく誰もいない教室でそんなものを見るなんて…いつもはハイテンションでいる愛の中で思考が巡る。だがボタンが外されていくシャツの下にあったのは柔肌ではなく別の衣服であった。

「え…どういう、こと？」

思わず愛が疑問を投げかけるが途端にその答えは確かなものになっていく。歩夢の腹部にはライブ衣装用のコルセットが巻かれていた。

「み、皆には内緒で…愛ちゃんと私だけの秘密、だから」

耳まで真っ赤に染めた少女の指が結ばれた紐にかかり解いてゆく。拘束が解かれたお腹を外気に触れさせコルセットが床に落ちていくと同時に歩夢は手で顔を隠す。

どむん！ぼよん！

限界まで腹肉を押し込めていた拘束から解き放たれた勢いで下腹がスカートをめくりあげ乗る。その上に鎮座する二段目の腹肉は肥満とまではいかなくとも、ぼっちゃりの域をギリギリ超えないラインと言えるだろうか。これでプールの授業があるものならスクールアイドルの激太りとして校内の噂になりそうな程である。

「…今の体重、聞いても良かったりする…？」

「な…ゆう」

愛が恐る恐る現在の体重を尋ねると間髪入れずに小さな声が返ってくる。だがあまりに小さすぎて聞こえず聞き直すと。「なじゆう、きゆう」

聞こえてきた数字は七十九キロ、つまり八十キロ手前。コルセットを付けていた状態であれば顔が丸くなりボディラインが緩くなった程度で済んだが、歩夢の腹部を目の当たりにしてその数字は現実味が過ぎる。

「…うう…きゃっ…愛ちゃん、くすぐりたい、よ…」

体重を聞き思わずその脂肪の厚さを確かめなくなったのか愛の手は無意識のうちに腹肉を鷲掴みにしていた。両手で掴むほどは成長していないものの片手で採れば指と指の間から溢れる贅肉。これが同じスクールアイドルの身体についているのだ。歩夢の声を聞いて愛は我に返る。手を離せば再びぼよんとスカートに乗る腹肉。この現状を再確認した愛は歩夢に返す言葉をさがしていた。

「あつ、ごめん…！そうね…分かった！このことは愛さんと歩夢だけの秘密！皆には黙っておくからちゃんとダイエットする事！この状態でライブの練習してもしバレたら困るじゃん？大丈夫だって！歩夢はダイエットという名の自主練に励むって事で！皆には適当に理由作って話通しとくからさ！」

思考の行き着いた結論に愛はいつもの笑みを添えて目の前の少女に伝える。それに対して安堵したのか歩夢は手で隠し

ていた顔を明かし、ホッとした表情を見せた。

「ありがとう…愛ちゃん…！」

こんな歩夢は見たことない、そう思った愛に歩夢は勢いよく抱き着く。

「わ、分かったから！というからお腹当たってる！」

柔らかいクッションのような腹肉が愛の引き締まった身体を包み込む。名目上は離れるよう求める愛だったが内気持ちいいと感じていたかもしれない。これが二人にとって秘密の放課後であり、歩夢の激太りを加速させることとなった。

「はあ…良かったあ…！太っちゃったこと、ずっと一人で抱え込むのは辛かったし愛ちゃんにだけでも打ち明けられて…！」

帰宅して自室のベッドに身を投げ込む歩夢。きしむ音をもともせず心の声が言葉として出る。幼馴染は去年から海外留学、そのため悩みを打ち明けられる一番の友人がいない彼女にとっては不安で仕方なかったのだろう。それに加えておやつに学食でハニートーストを食べてしまうほどに食欲を抑えられなくなってしまった自分の自堕落さに嘆いていたのかもしれない。だがそれも愛の存在が穏やかにだめてくれた。

「安心したらお腹空いてさちやっとな…ダイエットは勿論頑張るけどとりあえず今はエネルギーを補充しないと…！だからちよっとくらい、いいよね…？」

ベッドから重たい身を起こしクローゼットを開ける。部屋中に広がる甘い匂い。ぽっちゃりしてきた娘を心配する両親にバレないよう、こっそりと隠してあるお菓子たち。四月の頭に届いた分とはまた別の箱が二つ重ねられていた。

「やっぱり良い匂い…！一つだけあと一つだけ！あむっ！」

制服を着たまま包装紙を外してチョコを口へ持っていく。一気に広がる甘みで今までの不安や心配がなかったかのよう
に消えていき、同時にこんな美味しいお菓子をくれるファンへの感謝が込み上げる。

「んん〜！やっぱり美味しい！もう一つだけ今日は食べても良いよね〜！はむっ！おいひい〜！あ、こっちも食べたい
な！いただきまあす！あむ〜！」

箱に敷き詰められたお菓子たちを夢中になって食べ進めていく彼女の腹部は次第に膨れていく。お菓子の大食いを一
人でしているような光景が終わりに近づき、この食事で八十キロを超えたであろう少女は皮下脂肪をうっすら押し上げ
るように張ったお腹を撫でる。

「ふう〜結構食べちゃった〜お腹もこんなに〜ちよつと気持ちいいかも〜」
自分のお腹をぐるぐると撫で恍惚の表情を浮かべる彼女の姿は自覚こそない物の自己肥育者と変わりないものである。
そうしているとすぐに夕食の頃合い、満腹になった少女は徐に立ち上がりキッチンへと向かおうとするが。

ブチンッ！ぼよん！

「…え」

溢れ出した腹肉が制服を押し上げ、肉のシルエットを浮き上がらせた。

「歩夢は一体何をしてるの…!?夏休みだっって言うのに練習に顔を出さないし、そもそももう三か月は顔出してないじゃ
ない！愛は何か知らないの？休む理由だっって愛から聞いてたじゃない？」

時は流れ夏休み。愛と歩夢の間で交わされた秘密の約束から三か月が経過し、順調にいけば元の体形に戻っている頃
だろう。とはいえ愛から歩夢にダイエットの成果を聴くことはしていない。それは単に歩夢なら大丈夫だと思っている

からというのもあるが、それ以上に安易に歩夢に会っていると他のメンバーに見られては仮病や都合で練習を休んでいるという嘘がバレかねないからであった。だがそうは言ってももう三か月、これ以上秘密を守り続けるのにも限界が来ていた。その矢先、同じスクールアイドル同好会の三年、朝香果林から問い詰められているという状況になっているのである。

「いやあ…愛さんは何も知らないな〜!? 体調崩しちゃったんじゃない? ほら、夏だしさ!」

無理無理な理由付けをするが流石に果林にはもう通じず、眉間にしわを寄せ問い詰められる。こうなっては誤魔化しようもなく果林と愛の二人で歩夢の家を訪ねることになったのだが…。

「歩夢! すみません、歩夢さんいますか!」

凄じ剣幕で玄関のチャイムを鳴らす果林、歩夢の減量を神頼みしている愛。二人の様子は玄関から出てきた歩夢母にとっておかしなものだったであろう。歩夢母が顔を見せるや否や即、歩夢の居場所を尋ねる果林になんとも曖昧な返事が送られる。どうも「歩夢は河川敷までランニングに行った」というものだったが母は苦笑いを浮かべていた。

ここから河川敷までは遠くない、そう思った果林は愛の手を取り走り出す。夏の河川敷、蝉の鳴き声に数キロ走るだけでも滝のような汗が湧き出る澄んだ青空が広がっている。こんな中でランニングをするほどだ、きつと痩せているに違いない。というのが愛の考えであったがそれは夢に消え、人探しをするなら「歩夢!」などと大声で呼ぶのが定石だが、その必要はなかった。

どぶん! どむん!

はあ、んぐう…ぜえ…

橋の下から現れる巨体、まるで締まりのないその身体は毎秒数センチではないかと思われる速度で歩いては全身を揺らす。地面と擦るその足音は鈍く、体重の異常さを感じさせるものであった。

「愛、この事知ってたの…?」

走る足取りが止まり果林は神妙な面持ちで問う。その声色は怒りというより驚嘆や呆れの方が大きいと愛は感じた。

「マジで知らなかった…うん、ホントに…」

愛の目に映るブラウンの髪を揺らす巨体、吐息を漏らすその姿は運動不足の類ではなく全身を覆う贅肉によるものだろう。一般体形の二人が歩み寄るだけで追いつきそうさだ。

はあ…うう…もうちよつとで…休憩い…!

ぜえ、ぜえ…

目測だけで百キロを超えているのが明確に分かる肉体の吐息が聞こえる。同時に発せられる声は何処か聞きなじみのあるもので可愛らしさを帯びていた。その様子に果林はしびれを切らし邂逅を果たす。

「あら、歩夢じゃない。こんなところで何をしているのかしら?」

まるでいつもの挨拶のような言葉投げかけ突然現れた果林に大きく太った少女は驚きを隠せない。

「はあはあ…! 果林さん! ど、どうして…! あ、いや、これは違って!」

かつて練習の時に来ていた軽装が全身の贅肉に食い込む体形、隠しきれない腹回りに大きな二段腹が丸見えとなつては呼吸に合わせて波打つ。二重顎が首を埋め柔らかかそうな頬肉に包まれているが美形を保つその顔は紛れもなく上原歩夢だった。

「違うってどういう事でしょうね…! この肉は何!」

果林のか細い指先が歩夢の大きな下腹を鷲掴みにするが溢れ出る肉が定まった形を留めない。

「こ、これはダイエツトというか！ちょっと太り過ぎちゃったから…でも暑いしこれだけ走ればすぐに痩せられる、よね…？あはは…」

事の深刻さを理解しつつも何と言って良いのか分からない歩夢は自身の腹肉を揉む果林の手を跳ねのけ、自分で腹を揉みつつ苦笑するしかなかった。額に浮かべる汗はさらりと顎まで落ち、Tシャツを湿らせていく。夏の日差しの下、かなり大柄な少女と二人の一般体形アイドルの姿がそこにはあった。

「愛！あなたも何か言いなさい！」

「え、ああ…もしかして歩夢、太った…？」

この後、歩夢の自宅へと戻った三人は数時間部屋から出てこなかったという。



夏の終わりを感じさせる八月末、再び三人は歩夢の部屋に集まっていた。

クーラーの設定温度は二十三度。かなり冷やされた部屋に大きなぬいぐるみのような女の子。それを挟むように座る二人の美少女。

「歩夢、チョコ食べる？」

夏休みの課題を抱えたままの愛がテーブルの上のチョコレートを丸々とした歩夢に渡す。

「いいの！？じゃあお言葉に甘えて、いただきます！」

ぱくりと一粒を口に入れる歩夢を眺め、愛はどこか惚れこんでいるような顔で服に収まりきっていない彼女の下腹に手を伸ばす。

「ほんと、歩夢のお腹気持ちいいよね…！前より柔らかくなった？」

愛の予想は大方間違っていない。大幅に太った姿を愛と果林に見つけられたあの日以降、歩夢はダイエットをして元の体形に戻るより巨体を揺らし観客を魅了する謂わばデブドルとして活動を始めたのだが、思いのほか大盛況。今や毎日自宅に食べ物の贈り物が届くほどである。

「これだってファンから貰ったものだよね！愛さんびっくりだわ！でもま、歩夢が元気ならアタシは良いけどね！お腹気持ちいいし！はい、あーん」

まるで肥育の手伝いをしているような光景の二人、歩夢の現在の体重は三百キロを超え普通なら生活すら困難になるほどであったが仲間のアイドル達を筆頭に多くの人の支援の下、身体を動かし巨体を支えるだけの筋肉量は身につけている為に現状に至る。それも果林の指導が大きかっただろう。

「早く課題終わらせないと大変でしょ！！おやつは後！」

歩夢の肉体的誘惑に負けることなく凜としていたのだが…。

「果林さんもちよっと休憩した方が良いでしょう！」



そう言われ歩夢から差し出されるチョコの山に手を付けずにはいられなかった。

「わ、分かった！あとでちゃんと運動ね…！あむっ」

新学期、校内はデブドルとして一躍有名となり、時折授業中に空腹を伝えるお腹の音を鳴らす歩夢の裏で果林が丸くなったと噂されるようになったという。